２０２４．１．２１．主日礼拝説教
聖書： **マタイによる福音書 8 章 18～22 節**
『 こちら側から向こう岸へ 』

「弟子の覚悟」という大仰な小標題が掲げられています。マタイは 8～9 章にかけて 10 の奇跡物語を集中的に配置しています。学んでまいりました 1-4、5-13、14-17 の宗教的・社会的に蔑視されている人々の三つの救いの物語の後に、本日の記事は編集配置されました。それはイエスのこれら三つの治癒物語のまとめと共に、これから始まろうとする 23 節以下の物語の導入なのです。ここからの記事には 、イエスに従う者たちの負うべき責任と、それに伴う覚悟を促すことがテーマとなってゆくのです。分かり易く言えば「招かれたあなたは、これからは誰と共に、何処に向かって歩もうとしているのか。あなたはこの問いに答える義務がある」ということなのです。

マタイは 18 節の書き出しをマルコ 4;35 から借用しています。マルコではすぐに「嵐を静める」物語に直結していますが、マタイはそれを変更して、まず「向こう岸」という言葉を配置しています。これは具体的な地名に準拠することをあえて省略して、ただガリラヤ湖畔に佇むイエスの姿を印象的に描き出そうとしたのでしょう。ちょっとした風でも水面はさざめき、強い風が吹こうものなら嵐となり大波が押し寄せるガリラヤ湖とは人の心の揺れ動きの象徴でもありました。人とは常にこの湖畔に佇む者であるというのがマタイの見解なのです。
ところが、ここに集まる群衆とは奇跡に群がる現世利益的な集団でした。マタイは決して群衆を侮蔑的に描こうとしたのではなく、あくまで「向こう岸」への対比として「こちら側」の描きなのです。いわば奇跡に対する誤解を拒否し、住み慣れた「こちら側」から未だ見ぬ未知の、不安にも満ちた「向こう岸」への「渡り」が問われて行くのです。

19 節以下の問答でマタイは律法学者を登場させます。おそらく彼はマタイが属していた初代教会のキリスト者の律法学者なのでしょう。「どこへでも」という彼の意気込んだ呼びかけから自己過信が窺い知れます。さらに「先生」というイエスへの呼称はマタイでは弟子たちでさえ使いません。敵対者にしか用いない用語なのです。真剣に懇願する人々は「主よ」という呼称を用いていま

す。この律法学者も、イエスに関心を寄せつつも結局は「こちら側」でしか生きられなかった人の典型だということでしょう。肉親の葬りの拒否(21-22)についても、イエスは画一的な返答ではなく、その人の実情にそぐう忠告を与えて、その都度の決断、つまり「生き直し」の可能性を提案します。

わたしたちは自分が過去・現在・未来と前進して行くことの中に時の経過があると考えます。しかし、逆にわたしはじっとしているのに時の方が向こうから動いてきて、そのために過去・現在・未来を経験させられると考えることも出来ます。わたしが動くのか、時が動くのかは分かりませんが、動けないほど弱く・小さく・貧しい自分を省みれば、やはり時が動いているように思います。生きるということは、実は未来を目指して自分が動くことの中にあるのではありません。この弱く・小さく・貧しいという卑小の一点に突っ立って、どんなに時の側が流れ来ようとも、その中で動かない事柄、これが信仰という事実なのでしょう。

自分が弱く・小さく・貧しいという中に立つ者だけが「向こう岸」に渡れたのではなかったでしょうか。